

じゃない方聖女と言われたので

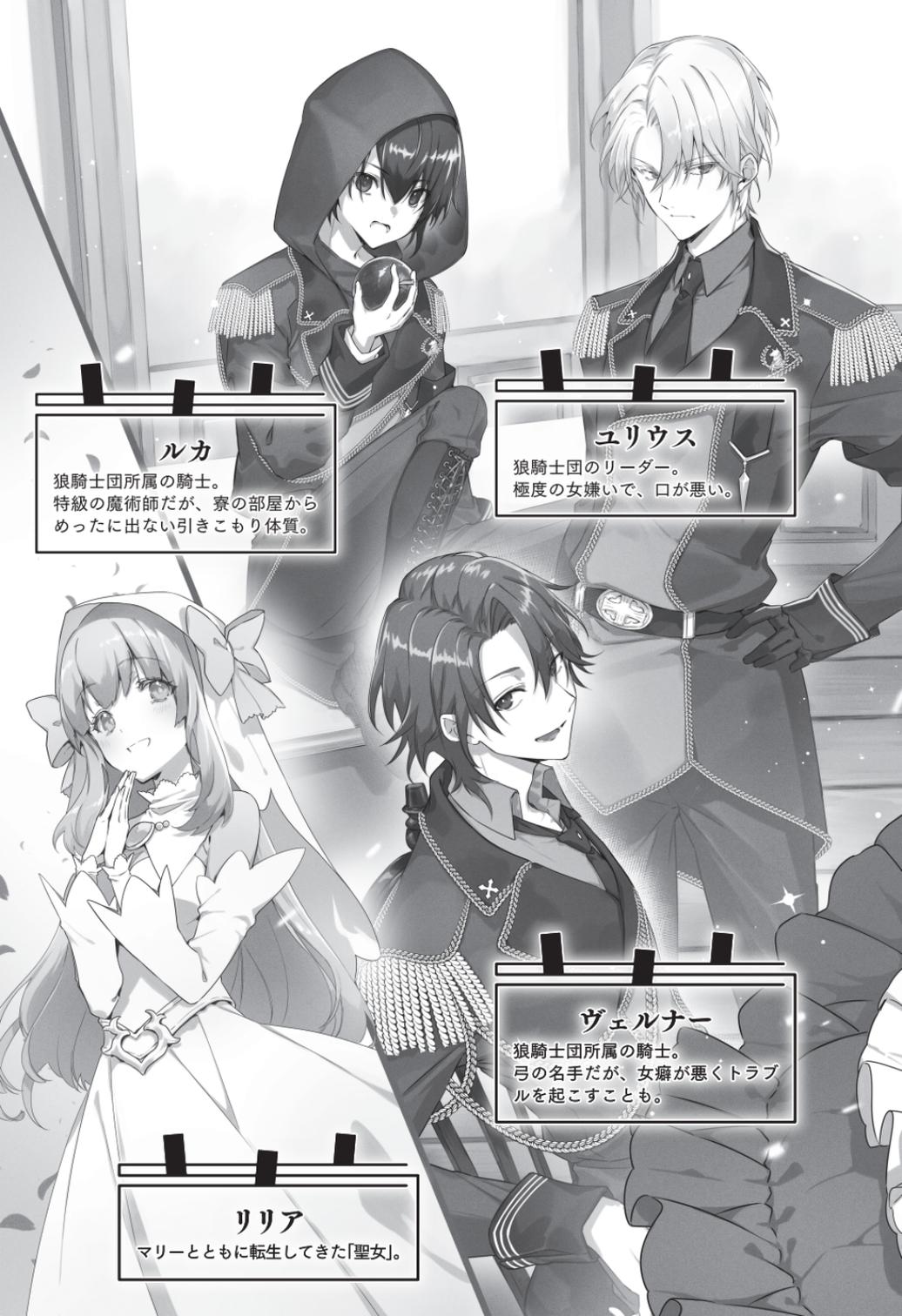
落ちこぼれ騎士団を最強に育てます



ミシェル
狼騎士団所属の騎士。
真面目で頑張り屋だが、やや空回りする傾向がある。

相良麻里
(マリ-)
異世界「アルジェント」へと転生した主人公。リリアとともに転生したが、「聖女様じゃない方」と言われ放置される。狼騎士団の世話係として、評判の悪い彼らのマネージメントを引き受ける。

登場人物紹介



ルカ

狼騎士団所属の騎士。
特級の魔術師だが、寮の部屋から
めったに出ない引きこもり体質。

ユリウス

狼騎士団のリーダー。
極度の女嫌いで、口が悪い。

ヴェルナー

狼騎士団所属の騎士。
弓の名手だが、女癖が悪くトラブ
ルを起こすことも。

リリア

マリィとともに転生してきた「聖女」。

じゃない方聖女と言われたので
落ちこぼれ騎士団を最強に育てます

1

Contents

序章	王の剣	06
第一章	聖女オーディション、一次敗退	14
第二章	早くもクビの危機!?	47
第三章	騎士団イメージアップ戦略	85
第四章	新メンバー加入	119
第五章	いざ、夢の大舞台へ!	214
第六章	二人だけのカウントダウンイベント	268
終章	いつか君の手に栄光を	296

序章 王の剣



お祭りの日にふさわしい晴れ渡った青空。

今日は年に一度、王都で開かれる『感謝祭』だ。

大広場は旅芸人や吟遊詩人の演し物で賑わっており、王宮へ続く大通りには様々な屋台が軒を連ねている。マリーはその一角に目を奪われていた。

「すごい……あれも魔術で動いているのかしら……」

明るい茶色の髪を耳に掛け、緑色の大きな瞳でまじまじと観察する。

マリーの目の前では、どう見てもただのぬいぐるみにしか見えない熊が、糸もないのにまるで生きていくかのようにひよこひよこ動き回っていた。

その他にもシャボン玉が割れたと思えば虹色の小鳥になったり、土で出来た巨人と芸をしていたりと、初めて目の当たりにする光景の数々にマリーはキラキラと目を輝かせる。

やがて背後から「マリー」と声をかけられた。

「ここにいたんだ。探したよ」

「あっ、ごめんミシエル。つい夢中になっちゃって」

「あはは、分かるよ。おれも最初の頃は、よくはぐれてユリウスに怒られたから」

ミシエル、と呼ばれた赤い髪の少年は「はい」とマリーに白い紙と何かの串焼きを手渡した。

「はい。マリーの分の投票用紙。それからこれも」

「これは？」

「ドラゴンの尻尾焼きだよ」

「ドラゴンの尻尾!?」

マリーが目を見張ったのを見て、ミシエルは思わず嘖き出した。

「そういう名前っただけで、ただの鳥肉だから安心して。でもすつごく美味しいんだ」

食べてみると勧められ、おずおずと口に運ぶ。

ぱりぱりに焦げた皮がまるで鱗うろこに覆おわれたドラゴンの体表を思わせ、噛みしめると柔らかい身からじゅわりと肉汁が溢あふれ出した。マリーがはふと熱さを逃している、ミシエルが自分の投票用紙を取り出す。

「そういえば、投票も初めてだったよね」

「う、うん」

「二つ折りになっている用紙を開くと、中に各騎士団の象徴シンボルマークが銀色で描かれているんだ。このどれか一つを強く擦こすると、それだけ金色になる」

ミシエルの説明に追いつくべく、マリーは串を持っていた手を慌あわてて拭ふくと、先ほど渡された投票用紙を広げた。

まるで鳥が翼を広げたような形のそれには、中央に各騎士団の象徴——獅子、鷲、鹿、狼のマークが描かれている。マリーがいちばん下にある『狼』のマークを慎重になぞると、うっすらとした銀色が煌めくような金色に変わった。

同時に『サガラ・マリー』という名前も浮かび上がる。

「選んだらまた畳んで、街中にある投票箱に入れるだけ。簡単でしょ？」

「うん。でもすごい不思議な技術……。これも魔術なの？」

「多分ね。おれもあんまり詳しくは知らないんだけど」

するとミシエルが「あつたあつた」と大通りの角を指さした。

そこにはかなり大きめの鳥かごが掲げられており、中にはマリーの持つ投票用紙と同じものがぎっしりと詰まっている。

「これが投票箱だよ。……さて、と」

二人は手にしていた紙をそれぞれ投じると、投票箱の前で手を合わせた。

そのまま揃えたかのように、同じことを口にする。

「——『狼』騎士団がいちばんになりますように！」

互いの願いを聞いたあと、二人はぱちくりと目を合わせた。

すぐに噴き出して笑っていると、そんなマリーたちのもとに、水色の髪が苛立った様子で近づいてくる。

「お前たち、こんなところで何してる」

「あ、ユリウス！」

「そろそろ発表だ。行くぞ」

「は、はい！」

ユリウスに連れられ、三人は街の中心部、大聖堂の前に向かう。

そこには普段から四つの銅像——獅子、鷲、鹿、狼が飾られており、大通りの遥か先にある王宮を見守るように配置されていた。他の騎士団も自分たちの銅像の前に集合しており、マリーたちが訪れると《狼》像の下にいた二人が、軽く手を振る。

一人は長身で茶色の髪、もう一人は比較的小柄で頭にはフードを被っていた。

「やつほ。マリーちゃん、なんか良いものあった？」

「はい、ヴェルナーさん！」

「まったく、目を離すとすぐはぐれるんだから」

「ルカさん、すみません……」

結果発表の時間が近づくにつれ、周囲には市民の姿も増えてくる。

この日は、自分が最前ひいきにしている騎士団と触れ合えるチャンスともあって、特に《獅子》騎士団の周りには多くの人が集まっていた。

一方マリーたちの《狼》騎士団には閑古鳥かえこどりが鳴いている。

そんななか、通りがかった一人がミシエルに声をかけた。

「おいミシエル、今年も《狼》は最下位確定かー？」

「ち、違いますよ！ 結果を見て、驚かないでくださいね！」

分かった分かったと笑いが起き、それを見たミシエルは不満そうに唇を尖らせる。

マリーは苦笑しながら、彼の服の袖を引っ張った。

「ほら、そろそろ始まりそうですよ」

やがて大聖堂から、一人の美しい女性が見せる。

白く長い髪を春風にたなびかせ、純白の衣装を身に纏っていた。瞳は澄んだ薄紫色。手には身

の丈ほどもありそうな豪華な杖を持っている。

その圧倒的な迫力に、マリーはミシエルにこっそり尋ねた。

「あ、あの方っていったい……」

「たしか、魔術師団の団長だよ。噂には聞くけど、おれも見るのは初めてかも」

「魔術師団の団長さん……」

女性は涼やかな表情のまま大聖堂の階段を下り、四つの銅像の前に立った。

それに合わせてどこからともなく、祭りの司会者らしき男が現れる。

『さあ、いよいよやってまいりました！ 我が王と民にもっとも愛されし騎士団——その名も

《王の剣》を決める、運命のお時間です!!」

(ついに結果発表……)

緊張のあまり身震いしているマリーに気づいたのか、ミシエルがにこつと微笑ほほえんだ。

「大丈夫だよマリー。ここまで来たら、あとは天に任せるだけだ」

「ミ、ミシエル……。そうだと思うけど、でも」

すると反対側に立っていたユリウスが、呆あれたような顔つきで腕を組む。

「心配しなくとも、『ヴェルナー票』は嫌でも集まる。ゼロということはない」

「そういう心配じゃないんです、ユリウスさん！ だって一年間、あんなにみんな頑張ったのに……」

ちらりと後ろを振り返るとヴェルナーやルカと目が合い、彼らはマリーを安心させるかのようにそれぞれ口角を上げた。マリーは再び前を向くと、自分たちの徽章きしょうにも刻まれている《狼》の銅像を見上げる。

(大丈夫……きっと私たちの騎士団がいちばんに……！)

やがてステージ脇の司会者が、結果を待つ騎士と市民たちに向けて叫んだ。

『今年も絶対的正義《獅子》騎士団が勝利するのか！ はたまた情熱の《鷲》騎士団、叡智えいちの《鹿》騎士団、いや、まさかの大穴《狼》騎士団という可能性も捨てきれないぞお!? さあ、今年の名誉ある『王の剣』は——』

司会者の声を合図に、魔術師団団長とされる女性がゆっくりと歩み出る。

彼女は手にしていた杖を高く掲げると、まるで踊り出すかのようにふわりとそれを傾けた。杖の上部に取り付けられていた長い銀のリボンが優美な曲線を描き、やがて歌声のような詠唱えいしやうが聞こえてくる。なんて幻想的な一幕だろう。

（お願い——！）

雲一つない青空の下、マリーは彼らと出会った日のことを思い出していた。



第一章 聖女オーディション、一次敗退



『……？』

『……？』

相良麻里が目覚めると、そこは未知の世界だった。

足元には虹色に輝く謎の空間が広がっており、周囲は霧がかかったように淡い光を纏っている。体の感覚もなんだかはつきりとせず、ふとした瞬間に上下すら分からなくなる不安に陥った。

例えるなら——天国、と呼ぶにふさわしい幻想的な場所だ。

「ここはいいたい……」

『マリー。ようやく気がついたのですね』

頭上から響く艶やかな女性の声に気づき、恐る恐る頭上を仰ぐ。

そこには緩く波打つ金色の髪に澄んだ緑色の瞳。造作は著名な彫刻のように整っている——まさにこの世で見たことがないほど、完璧で美しい女神さまが微笑んでいた。

（すごい……今まで見た芸能人の誰よりも神々しい……）

そこでようやく、マリーははっと身を強張らせた。慌てて愛用の手帳を探す——が、不思議なことにいつもジャケットの胸ポケットに入れていたそれが見あたらぬ。

すると再び女神の美しい声が聞こえてきた。

『マリー？ どうしましたか』

「あの、私このあとスケジュールが詰まっています、すぐに迎えに行かないとまた怒られて」

『その心配はありません。あなたは亡くなっているのですから』

「え？」

物騒な単語にマリーは目をしばたかせる。

一方女神は慈愛に満ちた笑みを浮かべながら、そっとマリーの眼前に手を伸ばした。

何もなかった空間に、突如金色の文字列が浮かび上がる。

『——相良麻里。芸能事務所のマネージャー。慢性的な過重労働の末、深夜二時五分に自動車で単身事故を起こし死亡。享年二十六歳……あらまあ、随分と時間に追われていたようね』

（そうだ私……あの時運転操作を誤って……）

女神からの説明を受けた途端、マリーの脳裏にこれまでの過酷な日々がありありと甦った。

大学時代、経理の仕事を希望して就職活動したがごとくお断りされ、事務職希望で申し込んだ芸能事務所になんとか拾ってもらえた。

だが実際に入社すると「急に欠員が出た」という理由でマネージメント部門に回されてしまい——それから、あの地獄のような日々が始まったのだ。

（自由気ままなアイドルたちに朝から晩まで振り回され、怒鳴られ、頭を下げ、命令され……）

月残業百時間はよくあること。超過勤務手当などつくはずもなく、もらえるのは毎月決まった固定給のみ。まさに定額働かせ放題である。

それでも花の芸能界。有名人やアイドルと仕事が出来ると、キラキラした世界を思い浮かべる人も多いだろう。だが実態は、彼らの好き勝手な要望に^{こた}え、八つ当たりを受けとめ、なだめすかして仕事に行ってもらおうという、心底気疲れする仕事ばかりなのだ。

マリーのいた事務所も例外ではなく、一人のマネージャーが複数組のアイドルを担当するのは当たり前。新人女性グループの愚痴^{ぐち}を聞いている間に、中堅男性アイドルがSNSで過激なことを^{つぶや}呟いて炎上し、それを鎮火しているうちに現場に迎えに行く時間が追ってくる。

前世を終える原因となった交通事故も、「呑みに行つて終電を逃したから迎えに来て」というタレントからの急な呼び出しが^{はったん}発端だったはずだ。

(うう、迎えが来なくて怒ってるだろうな……)

思い出せば出すほど胃が痛くなり、マリーは思わずお腹を押さえる。

女神もまた、マリーのこれまでの苦行を知ったのか、片手を^{ほお}頬にあてると^{うれ}憂いを含んだ^{おもだ}面立ちではあと息を吐いた。

『大変だったのね……。そのせいで、与えられた命数を使い切る前に旅立ってしまった』

「めいすう、ですか？」

『寿命、というのかしら。あなたにはまだ生きるべき時間が残っていたのに、他者からの強い干渉

によって無理やり奪われてしまったのよ』

でも大丈夫、と女神は微笑む。

『あなたをここに呼んだのは、そんな魂を救済するため。マリィ、あなたはこれから新しい世界に赴いて、そこで残された命数をまっとうしてもらいます』

『新しい世界……?』

『文字通り、今までとは常識も歴史もまったく違う別の世界よ。もちろん似た部分もたくさんあるけれど、少し驚くようなこともあるかもしれないわ。でもそれはそれ。恐れずに楽しむ気持ちが大切よ』

『は、はあ……』

要は「残りの人生を別の場所で生きる」ということらしい。

とりあえずあの過酷な毎日から解放されるならなんでもいい……とマリィがぼんやり逡巡していると、女神が両手の平をマリィに向かって差し出した。

『それじゃあマリィ。新しい世界に旅立つあなたに、私からギフトを授けましょう』

『ギフト?』

『前世で頑張ったご褒美とのかしら。何でもいいの。誰をも虜にする美貌、世界を牛耳れるほど優れた頭脳、人間離れた運動神経——もちろん無限ではないですけどね? さあ、何がいいかしら』

(何がいいか、と言われても……)

列挙された錚々たる提案を脳内で繰り返したマリーは、睡眠不足の頭をなんとか稼働させたのち

——ようやくおやすみと口を開いた。

「じゃあ、ちよつとでいいので……」

『うんうん』

「ここで寝てもいいですか……。ここ三日、横になって休めて……なくて……」

『えっ?』

大きく目を見開く女神をよそに、マリーはどさりと横向きに倒れ込むとすぐさま眠りに落ちた。

女神はしばらくきよとんとしていたが、すやすやと寢息を立てるマリーの傍にしゃがみ込むと、

その頬にぶにと指を押し当てる。

『すごい……全然起きないわ』

本当に限界だったのだろう。

気持ちよさそうに眠るマリーを見つめ、女神は慈しむように目を細めた。頬にかかる髪をそつ

と耳にかけてあげながら、子守歌のように優しく囁く。

『今はゆっくりおやすみなさい。次に目覚めた時は、新しい世界で——』



「——んんっ……」

深い眠りから覚めたマリーは、かつてないほど暗れやかな気持ちで大きく伸びをした。

(よっ……く寝たあ……。こんなにゆっくり出来たのいつ以来かしら……)
幸せを噛みしめたあと、ゆっくりと上体を起こす。

そこでようやく自分がベッドではなく、不思議な文様が刻まれた硬い石座の上にいたことに気づいた。目の前にそびえ立つ白い壁には、剣を持った男性の巨大な浮彫細工——周囲には、男性を守るように獅子、鷲、鹿、狼の四匹の動物が刻み込まれている。

(どい、ここ……?)

教会のような、神殿のような。荘厳で静謐な建物。

マリーのいる石座の前から出入り口らしき扉まで、真っ赤な絨毯が一直線に敷かれている。

おまけに石座に寝ていたのはマリーだけではなく——

(誰かしら。すっごく可愛い子……)

隣にはなかなかお目にかかれないレベルの美少女が横たわっており、マリーはしげしげと観察した。全体的に色素が薄く、髪は淡いピンク色だ。手足は折れそうなほど華奢で、都内にある有名進

学校の制服を身につけている。

一方マリーの衣服は、よれよれのスーツだ。

(アイドル? でもどのテレビ局でも見たことないし……読者モデルとか?)

するとマリーの視線を感じ取ったのか、美少女がぱちと睫毛を持ち上げた。

その瞳もまた綺麗なピンク色で、初めて目にする色合いにマリーは少しだけ驚く。「あの」と話しかけようとしたところで、突然扉の向こうから物々しい足音が近づいてきた。

(な、何!?)

すぐに扉が開かれ、神官然とした男性たちが入ってくる。

彼らは石座の前に並び立つと、マリーたちに向かって両手を掲げた。

「聖女さま! ようこそ我が国に——んんっ!」

だが出迎えに現れた神官たちは、何故か皆一様に困惑した表情を浮かべていた。

そのうち美少女が完全に目を覚まし、たおやかに体を起こす。

その可憐な振る舞いを目にした神官の一人が、おおっと感嘆を漏らした。

「なんと美しい……やはり間違いいはなかったか」

「しかし二人いるとは聞いていないぞ」

「いやどう見ても一目瞭然だろう」

(……?)

耳に入ってくる言語はどう聞いても日本語ではない。といって英語でもない。

完全に未知の言語——だがどういうわけか、頭の中で自然と意味が理解できる。

(何? この『同時通訳』みたいな感じ……)

神官たちは異国の言葉で何やらひそひそと囁き合ったあと、ようやくマリーの隣にいた美少女の前にうづや恭しくひざまず跪いた。

「聖女様……ようこそ我が『アルジェント』へ」

(アルジェント?)

マリーがはたと首を傾かげていると、聖女様と呼ばれた美少女が神官たちの前にそつと立った。

そのままおすおすと小首をかしげると、恥かずかしそうに繰り返す。

「私が……聖女?」

「はい! どうか我々にそのお力をお貸しただけだと……」

「まあ……」

頬を赤くした美少女が微笑むと、何とも言えない愛らしさが神殿中にふわっと広がった。先頭にいた神官はもちろん、後ろに並び立っている者も含めて皆完全に目を奪さらわれている。

そうして美少女が慎重に石座から足を下ろしていると——神官の一人が脇にいたマリーにも声をかけた。

「ほら、お前も早く下りろ。聖女様じゃない方」

(じゃ、じゃない方……)

先ほどの美少女とは百八十度違う横柄おうへいな態度に、マリーもさすがにむっとする。

しかも石座から下りているうちに、神官たちは美少女を伴ってさっさと神殿から出て行こうとしていた。

このままではまずい、とマリーはいちばん後ろにいた男性を捕まえる。

「あの、私はこれからどうしたら」

「とりあえず別棟にある客室に行け。あとで誰かが説明に向かうだろう」

「は、はあ……」

ぼつんと取り残されたマリーは、仕方なく廊下にいた門番たちに別棟の場所を尋ねた。

壮麗そうれいな神殿から離れるにつれ、華美な装飾のない実用的な建物に変わっていく。中庭に面した渡り廊下を歩いていると、どこからかひゃんひゃんと甲高いかんだか叫びが聞こえてきた。

(? 犬の鳴き声……)

次の瞬間、マリーの顔にぼふんと茶色い毛玉がぶつかった。

「ぎゃー!？」

反射的に両腕を差し出すと、即座にどしっとした生命の重みが落ちてくる。

(本当に犬……。しかもポメラニアンっばい……)

はっはと舌を出しながら、じっと見つめてくるつぶらな瞳と見つめ合っていると、庭の方から

焦った声と足音が近づいてきた。

現れたのは赤い髪に赤い目をした少年。

軍服のような、きつちりした黒い衣装を纏っている。

「すみません！ ちょっと目を離したすきに」

「あ、い、いえ」

「ほら、ご主人様が待ってるから早く帰ろう？」

歳は高校生くらいか。

無邪気な笑みで子犬を抱き上げるその姿に、マリーの胸は何故かざわめいた。

（この子、どこかで……）

だがマリーが記憶を手繰り寄せるよりも早く、赤い髪の少年はにこっと微笑む。

「ありがとう、助かったよ。じゃあ！」

そう言うと赤髪の少年は、来た時同様澆刺とその場を去っていった。

まるでドラマのワンシーンのような出会いにマリーがぼうっとしていると、後ろから歩いてきた

若い神官に声をかけられる。

「なんだ、まだこんなところにいたのか。ちょうどいい、説明するから部屋に行くぞ」

「は、はい！」

そうしてマリーが連れて来られたのは、簡素なベッドと机があるだけの小さな部屋だった。

机の上には小さな鏡があり、マリーはこっそり自身の顔を確認する。

たっぷり眠ったためか色濃かったクマはすっかりなくなり、心なしか若返ったようにすら感じられた。髪の色は前世のままだが、不思議なことに目の色が焦げ茶から緑に変わっている。

（というか本当に若くなった？ 学生の頃みたい……）

やがて若い神官は、この『アルジェント』と『聖女様』のことを語り始めた。

いわく『聖女様』とは、この世界に遣わされる女神の使者のことらしい。

女神様から授けられた『奇跡の力』とともにこの地に下り立ち、女神に代わって国王陛下を助け、アルジェントを守る使命を負っているという。

「過去の聖女様は、これまでも我が国に降りかかった多くの災厄さいやくや争いを解決してくださった。そして今年、新たな聖女様が降臨されると国中の占い師が予言したんだ。そして見事、素晴らしい聖女様をお迎えすることが出来た！」

「なるほど……。それであの子が聖女様、というわけですね」

ふむふむと理解を示すマリーの様子に、若い神官は呆れたように頭を掻く。

「そういうことだ。まあ言っておくが、お前は違うからな」

「え？」

「聖女様が二人同時に現れるなんてありえない。おそらく、偶然まき紛れ込んだだけだろう」

「偶然紛れ込んだ……」

「しばらくはこの部屋を貸してやる。が、処遇をどうするかは会議の結果次第だな」

若い神官は偉そうにそれだけを告げると、扉を閉めて出て行ってしまった。

マリーはしばしばかんとしていたが、仕方なくベッドの端に腰かけうーむと腕を組む。

（会議……この世界に来てまで、その単語を聞くことになるとは……）

前世でも話し合いというのは建前で、やれもつと営業しろだのアイドルたちの管理がなつたらんだのと叱咤されるばかりだった。そんな暇があったら五分でいいから寝かせてくれ——と恨み節を吐いていた思い出を振り払うと、マリーはそのままぼすんとベッドに倒れ込む。

（こういうの……異世界転生っていうんだっけ……）

ここ数年は忙しすぎて、好きな本も漫画も読む時間がなかった。

ただ仕事を終えた深夜、寂しさをまぎらわすためにつけていたテレビで、流れていたアニメを思い出す。イケメンに生まれ変わった主人公が最強の力を使って敵を倒し、旅先で出会う美少女たちを次々と虜にするのだ。

それから——と思い出そうとするも、マリーの意識は次第に途切れ途切れになっていく。

（また、眠気が……）

あれだけたくさん寝たはずなのに、ブラック企業の疲労は消化しきれなかったのか、再び強い睡魔に襲われる。何か行動のヒントにならないかと、異世界転生アニメの主人公のことを必死に考えしてみるが、どうにも自分の状況とは違いすぎる気がした。

(そもそも私はただの一般人だし……。結局『ギフト』？ も貰わなかったし……)

おまけに真正面から「聖女じゃない方」と言われてしまった。

心臓に小さな棘とげが刺さったようなわずかな悲しみを感じつつも、マリーはやがてくうくうと穏おだやかな寝息を立て始めたのだった。

翌日。

ぱちと目を開けたマリーは、その場で文字通り飛び上がった。

「お迎え！ とあとお弁当の手配と次の取材の日程と——って、あれ……？」

急いで携帯を探そうとしたが見当たらない。

マリーはそこでようやく、自身が別の世界に来ていたことを思い出した。死してなお仕事をしようとするとは、我ながら社畜しゃちく魂たましいが恐ろしい。

(そっか……。もう夜中に呼びだされることも、寒い中外で五時間待たされることもないんだ……)

すると扉の向こうからノックをする音が聞こえ、マリーは慌ててベッドから立ち上がった。

扉を開けると、フルーツやパンが載ったお盆を手にした可愛らしいメイドが立っている。

「おはようございます。朝食をお持ちいたしました」

「あ、ありがとうございます……」

前世ではまともな朝食を準備する時間などなく、マリーは深く両手を合わせると感謝しながらそれらを口に運んだ。その途中、食事を持ってきてくれたメイドに確認する。

「あの、私の処遇？　って決まったんでしようか」

「すみません。朝食をお持ちするようにと言われただけなので、そこまでは……」

「そうですか……」

「はい。ですので今しばらくはこのお部屋に待機していただければと。もちろん近くを散策するくらいは構いませんので」

空の食器をメイドが持ち帰ったあと、マリーは一人ぼんやりと天井を仰いだ。

せっかく過酷な長時間労働から解放されたのだから、ここは心行くまで惰眠だみんを貪むさぼるべきなのでは？　と考えたものの——どういわけか身体からだがそわそわと落ち着かない。

（まさか私、働きすぎて……じっとしていられなくなってしまったのでは……）

その後もシーツの上を二転三転していたマリーだったが、いよいよ無理だと諦めあきらめベッドから立ち上がった。

「天気も良さそうだし、せっかくだからちよつと見て回ろうかな」

そのままの恰好だと目立つので、メイドが準備してくれたこちらの衣装に着替える。廊下を通り抜けて中庭へ出ると、そこには眩まぶしいばかりの青天が広がっていた。

（うわ……。太陽光ってこんな強かったっけ……）

仕事は基本昼夜を問わず。それにテレビ局にいる間は日差しを浴びることなどない。

季節の花々で飾り立てられた遊歩道に従って歩いていくと、立派な邸がいくつも目に留まる。どれも重厚な石造りの建物ばかりで古い歴史を感じる佇まいだ。たえず

(素敵……。海外旅行に來たみたい)

やがてマリーは広場のような場所に出た。

どうやらこの辺りは誰もが入れる区画らしく、役所と思しき建物に多くの市民たちが入れ代わり立ち代わり出入りしている。

するとその中央でチラシのようなものを配っている少年を発見した。昨日犬を追いかけてきた赤髪の子だ。

「どこかで見かけたら教えてください、お願いします！」

(……?)

チラシを受け取った人の手元をのぞき見ると、どうやらいなくなった猫を捜しているらしい。

するとマリーの存在に気づいたのか、少年が「あっ」と声を上げた。

「君、昨日犬を捕まえてくれた子だよね！」

「は、はい！」

「改めてありがとう。あ、良かったらこれ」

差し出された迷い猫のチラシに目を落していると、少年が頬を掻きながらはにかむ。

「おれ、ミシエルって言うんだ。もし見つけたら、《狼》騎士団に教えてくれないかな」

「《狼》騎士団……ですか？」

「うん。これでもおれ、一応騎士だから」

ミシエルはそう言いながら、襟元についていた狼の徽章を軽く持ち上げた。訳も分からずマリリーが頷くと、ミシエルはあの爽やかな笑みを残して再びピラ配りに戻っていく。

書かれている文字はどう見ても日本語ではない——が、マリリーは不思議と読解出来た。

（本当だ……『情報は《狼》騎士団まで』……）

だが改めて周囲を見回してみても、彼以外に騎士らしき姿はない。

多くの人に無視されながらも必死に市民に声をかけるミシエルの姿に、マリリーはようやく彼に覚えた既視感を思い出した。

（そうだ、あの子に似てるんだ……）

マリリーが初めてマネージメントを担当した、新人アイドルグループのリーダー。

地方から出てきた男の子で、初めての東京と芸能界という仕事に目をキラキラと輝かせていた。

若かったマリリーも手探りではあったが、彼らをスターにするため身を粉にして働いたものだ。

（でも結局……何も出来なかった）

小さなライブハウス。呼び込みをした。チケットを手売りもした。営業出来るとなれば、どんな辺鄙な会場でも赴いた。ダンスも歌唱もレッスンをした。どうすれば人気が出るか、全員で夜遅く

まで知恵を出し合った。

だが群雄割拠のこの世界——気づけば一人、また一人と夢を諦めていった。唯一残っていたリーダーも地元に戻り、マリーは自らの無力さに打ちのめされながらその背中を見送った。

(私が……もつとちゃんとしていれば……)

次々と生まれ、あぶくのように消えていく。

そんなアイドルなど会社にはさして重要ではなく、マリーは悲しみに暮れる間もなく、すぐに次の担当に回された。

そうして売れては消え、デビューしては忘れられていく芸能人たちを見続けているうち、マリーの心はすっかり麻痺してしまったのだ。

(あの子たち……どうしているのかな)

そつとミシエルに目を向ける。

思い出した途端、あのリーダーの子と重なって見え——マリーは罪悪感から逃れるようにそつと広場から立ち去った。

そうして彷徨っていたマリーだったが、ここにきて戻り方が分からなくなってしまった。

(どうしよう……。一度広場に戻った方がいい?)

歩いていた路の舗装はいつの間にか無くなり、やがて古びた一軒の建物が姿を見せる。

王宮の近くにあつた立派な邸とは違い、黒い外壁にはツタが茂り、庭には雑草が伸び放題だつた。二階建てのようだが、窓のカーテンはどこも閉まつたままである。

門扉には数羽のカラスも留まつており、非常に不気味な佇まいだ。

(廃墟……かしら)

あまり近づかない方が良い気がして、マリイはそれとなく距離を取る。

すると外壁の死角で気づかなかつたのか、曲がり角にいた男性とぶつかつてしまった。

「す、すみません！ 気がつかなくて」

「ん？ ああ、何だ人か。猫かと思つたぞ」

「ね、猫……？」

がっはつはと豪快に笑う壮年の男性を前に、マリイはぼかんと口を開けた。

日に焼けた肌。相当鍛えているのか、立派な上腕に丸太のような太腿。張り出た胸筋で服のボタ

ンがはじけ飛びそうだ。男性は顎に手を添えたまま、ふーむとマリイを見下ろした。

「お嬢ちゃん、初めて見る顔だな。もしかしてあれか。聖女様と一緒に来たっていう」

「は、はい。そうですが……」

「おーおーなるほどな。聖女様は相当だったが、あんたもえらく可愛いんだな」

「か、かわつ……!?!」

初めて耳にする誉め言葉にマリイは思わず顔を熱くする。

すると男性は腕を組み「うん？」と首を傾げた。

「しかしそんな客人が、どうしてこんなところにいるんだ？」

「その、特にやることもなくて出歩いていたら、道に迷ってしまっただけ」

「あー……。そういや、なんかそんなこと朝議ちようぎで言ってたな」

すると男性はにつと口角を上げたあと、得意げに太い人差し指を立てた。

「たしかお嬢ちゃんは聖女様じゃないんだよな。で、その扱いをどうするかはまだ決まっていなかったはずだ」

「は、はい。そのあたりは会議で決められると」

「それだそれ。そこで提案なんだが、やるのがねえなら騎士団の世話係をしてみないか？」

「世話係、ですか？」

「実は結構前に《狼》騎士団の奴が逃げちまってな。募集はしているんだが、いつまで経たっても人が来やしねえ」

《《狼》騎士団……》

その言葉を耳にした途端、ミシエルの姿が脳裏のうりをよぎる。

「その騎士団……っていうのはいったいどこにあるんですか？」

「ああ。これだよこれ」

「……え？」

男性がひよいと指し示したのは、たった今マリイが警戒していた廢屋同然の邸だった。

半信半疑でよくよく確認すると、確かに玄関の上に《狼騎士団 団員寮》という看板があり――入り口の傍には、見覚えのある子犬がちよこんと座っている。

(あの犬……昨日ミシエルさんが捕まえていた子よね?)

もうちよつとちゃんと見たい、とマリイは少しだけ門に歩み寄った。

すると隣にいた男性がそれを追い抜くように大股で踏み出し、崩れかけた門扉をくぐつてずんずんと勇ましく建物の方へと向かつていく。

「あ、あの！ 勝手に入つては良くないかと」

「いーからいーから。そんなところから見ても、何もわかんねーだろ」

くい、と顎で呼ばれ、マリイは戸迷いつつも男性のあとを追った。

玄関に着くと先ほどの子犬が嬉しそうにマリイの足元にまとわりつく。昨日はなかつた首輪もしており、やはりここで飼われている子に間違いなさそうだ。

「んー？ まーた誰もいねえ。こりゃ賭場か酒場だな」

「だ、誰もいないんですか？」

「ああ。ちよつとやんちゃな奴らが多くてね。ほら、入った入った」

勝手知つたる他人の家とばかりに、男性はなおも奥に進んで行く。マリイもおつかなびつくり邸の中に足を踏み入れたものの、外観同様中も酷い有様だった。

(蜘蛛の巣やごみがすごい……。しばらく掃除していないのね)

廊下は歩きたびにぎしぎしと軋み、天井裏からは人の気配を察したネズミの逃走音がする。

キッチンだと紹介された場所にはもはや物置にしか見えず、長い間使用されていないようだった。

棚の上に重なっていた鍋を手に取ると、積もっていた埃がぶわつと舞いあがり、マリーはげほげほと涙目になる。それを見た男性は「がっはっは」と豪快に笑った。

「まー男所帯だところなるわな」

「男性だけ、なんですか？」

「他の騎士団には何人か女性騎士もいるんだがな。あいにく《狼》には――」

するとマリーたちが歩いてきた方から、何やらどかどかと賑やかな靴音が響いてきた。

現れたのは強面かつ屈強な輩ばかりで、マリーは男性の陰にささつと身を隠す。どうやら騎士団の面々が戻ってきたらしい。

「おい、なんか女がいるぞ」

「なんだって？」

「す、すみません！ す、すぐに出て行きますので……」

不良たちに取り囲まれたような物々しい雰囲気、マリーはたまらず男性の服をぐいぐいと引っ張った。

だが男性はがりがりと頭を掻いたあと、強面騎士団員たちに呆れたように投げかける。

「まったく……揃いも揃ってサボりやがって。急に帰ってくるから、お嬢ちゃんが怯えてんだろ
うが。そのいかつい面どうにかしろ」

「ひっでえ、そっちだって十分怖いくせに」

「さすがに無理っすよ团长」

(だん……ちよう?)

変わった名前だと目をしばたかせていたマリーだったが、しばらくして『团长』という漢字が
当てはまった。もしかしてこのおじさん、相当偉い人なのでは——と震えながら服の裾を放したあ
たりで、強面騎士団の一人がマリーの前に顔を突き出す。

「んで、お嬢さんはなんなわけ？」

「わ、私は、その」

「これから脅すな。もしかしたら、お前らの世話係になつてくれるかもしれねーんだぞ」

「えっ!？」

「ほんとに!？」

「まっ、まだそうと決めたわけじゃ」

しかしマリーの困惑をかき消すように、騎士たちの中から「おおおーっ」という大きなどよめき
が起こった。後ろにいた他の騎士たちもマリーを一目見ようと、必死に背伸びしている。

「まじか！ 女の子なんて初めてだぞ！」

「うわあ、なんかこの距離でも良い匂いする……」

「彼氏いるの？ もしかしてこの騎士団の奴!？」

(あ、あわわわ……)

猛獣の群れから取り囲まれ、舌なめずりされているような迫力に、マリーはひええと身をすくませる。

すると団長がさつと間に入り、マリーを庇^{かば}うようにしっしと手を振った。

「おら散った散った！ つーか働け、たまにはミシエルを見習え！」

「ちえー」

「まったねー」

左右に並ぶ肉食獣エリアを、団長の背中に張り付いたままなんとか通過したマリーは、再び崩れかけた門扉の前まで戻ってきた。溜め込んでいた息を一気に吐き出すと、青ざめた表情のままぶるぶると震える指で邸の方を指し示す。

「さっきのが、《狼》騎士団の皆さままでしょうか……」

「ああ。見た目は怖いが悪い奴らじゃない。今はユリウスがいなくてちよつと荒れてるがな」

「ちよつと……」

本当にこんなところにミシエルが所属しているのだろうか、とマリーは思わず眉^{まゆ}を寄せる。

それを見ていた男性が「で？」と嬉^{うれ}しそうに口の端を押し上げた。

「どうだ、世話係。してみる気になったか」

「ええと、その……」

「まああの男所帯だ。怖いと思うのも無理はない。だが人が足りないので本当でな。このまま管理に手が回らないようなら、『狼』騎士団ごと解散した方がという話もある」

「解散、ですか？」

「ああ。そうなればあいつらは他の騎士団に入り直すか……だがま、大半は田舎に帰るだろう」

「田舎に……」

複雑な表情を浮かべるマリーの背中を、男性はばしんと叩いた。

「まあお嬢さんはそんな気にすんな！もしやる気になったら、団長のロドリグに頼まれたと言ってくれ。すぐに話を通してやるからな」

「わ、わかりました……」

そう言うのとロドリグは熊のような大きな手をぶんぶんと振ったあと、また別の方角へと向かっていった。

取り残されたマリーは改めて《狼》騎士団の寮を見つめる。玄関先にいた子犬がくうんと寂しそくに尻尾を振っていた。

（なくなっちゃうのは可哀かわいそうだけど……。でも私が世話係なんて……）

今日のところはもう休もうと、与えられた部屋へ戻ろうとする。

だが結局どこをどう進んでも見覚えのある道に行きあたらず、結局元の広場へと戻って来てしまった。夕刻に近いためか、人の数が随分とまばらになっている。

(そう言えばミシエルさん……。猫、見つかったのかな?)

なんとなく彼の姿を探すが、どこにも見当たらない。

すると市街地の方からやってきた二人組の男性が、手に持ったピラを振りながら小馬鹿にした笑みを浮かべていた。

「見たかさっきの。《狼》騎士団も地に落ちたよなあ」

(……?)

それを聞いた隣の男性も同じく嘲笑する。

「ほんとな。『黒騎士』がいた頃は最強で、『王の剣』も五年連続とかだったのに」

「まあ、あの体たらくじゃ仕方ねーよ。仕事もせずにはサボってばかり。《獅子》を見習えってんだ」

(黒騎士……?)

いけないとは知りつつも、マリーはついつい耳をそばだてる。

そんな会話を聞かれているとは露知らず、男性たちの悪口はなおも続いた。

「犬捜しに、今度は猫捜しときた。噂じゃこないだ捜してた犬、時間かかりすぎて依頼主から引き取り拒否されたって話だぜ。海向こうから来た珍しい犬種だったらしいが」

「マジか。意味ねー」

「まあ愛玩犬あいがんけんなんて、どっかのご令嬢の娯楽ごらくだろうし。とつとと新しい奴飼うわな」

「つーかそんなせこい仕事、騎士団レベルで請け負うなよな。ああ、それくらいしかすることないのか？ たった一人でほんとよくやるよ」

ははは、と笑う男性たちをマリイは無言で見つめていた。

だがすぐに踵かかとを返すと、彼らが来た方に向かつて駆け出す。

(ちよっと、様子を見に行くだけ……)

王宮内の広場を抜け、正門をくぐって長い棧橋さなばしへ。

渡り切った先には王都の街が広がっていた。

街の中央にある大聖堂にまで続く、石で舗装された大通り。その左右には立派な商店や酒場、娯楽施設、宿屋などが立ち並んでおり、多くの人でにぎわっていた。

酒をおおる人々の歓呼かんこの声や、辻馬車つじばしが奏でる蹄ひづめの音。子どもたちがきやつきやと走り回り、それを母親たちが声高こゑたかに制止する。

そんな賑やかな雑踏を掻き分けて、マリイはようやく大聖堂のある広場へと到着した。

そこでは——赤い髪の少年が、たった一人で頭を下げていた。

だが道行く人々は彼の存在を無視するように避けており、チラシはあまり減っていない。

「お願いします！ どこかで見つけたら、情報を——」

(ミシエルさん……)